レオン州モリナセカ町におけるサンティアゴ巡礼路を訪れて

[5 月 22 日（火）]

【文責：渡部　浩】

視察が始まって 2 日目となった。今日も好天に恵まれた中、7 時 45 分にサンティアゴ郊外のホテルを専用バスで出発して、レオン・イ・カスティージャ州、レオン県の県都レオン市まで約 310km となる、巡礼の路をたどる視察が始まった。

「サンティアゴ巡礼のフランスルート」の最高峰で重要な地点の一つである「オ・セブレイロ峠」（ガルシア州とレオン州の境界地、標高 1337 m）を視察した。

オ・セブレイロは、ローマ時代以前に起源のある村で、ルゴ地方のベドラフィタ・ド・セブレイロ市に含まれる。峠からは、ガルシア地方の雄大な風景を望むことが出来た。

又、このルートで最も古い教会「サンタ・マリア・ア・レアル」の教会はローマ時代以前（9～10 世紀）に作られ、「キリストの聖杯伝説」（キリスト最後の晩餐で使われたと言われる聖杯）がある。中世以来の伝説では、テンプル騎士団が「本物の聖杯」を何世紀もの間、守り続けたというが、現在、ヨーロッパ各地にいくつか存在し、どれが本物かまだ判らないと言う。

又、このオ・セブレイロ峠には「パジョーサ（藁葺き屋根）の家」と呼ばれる古代住居を修復したものがあり、ガルシア地方の紀元前の生活の様子がうかがえる。

モリナセカ町ではアルフォンソ町長（前列右から２人目）と面会

11 時半頃に、レオン・イ・カスティージャ州、レオン県の公式訪問地である、モリナセカ町へ到着した。町長のアルフォンソ・アリアス・バルボア氏（右派の国民党、就任 19 年目）と面会した。モリナセカ町は、

面積 79 ㎢で、人口は 895 人の小さな町であるが、中世より「サンティアゴ巡礼」の重要地点であり、八世紀には、周辺に礼拝堂祈祷所などが作られ、又メルエロ川に橋が架けられて、巡礼者だけでなく、レオン州とガルシア州の交通の要所ともなった。

アルフォンソ町長の案内で町内の巡礼路関係施設を視察する一行

町長の案内で、町の観光案内所を視察。四国遍路についての展示室があり、2013 年当時の佐藤元日本大使や、愛媛県愛南町の清水町長と町長の写真をはじめ８８ヶ所回りの道中衣等多くの展示物があった。四国遍路については、この村は多くの知識と交流が見られることを、認識させられた。

そして、役場で町長との会見を行った。町長の話では、9 世紀の「聖ヤコブの墓の発見」により、サンティアゴ巡礼が起こり、そのルート上にあるモリナセカ町も 10 世紀近くを巡礼の歴史とともに歩んできたが、サンティアゴ巡礼のおかげで、民間のアルベルゲやホテル、又レストランやバルなどがかなり充実しており、観光産業を中心に人々の生活がなりたっているが、これからも住民生活の改善に努めていきたいとのこと。

モリナセカ町では四国遍路展示室を視察

又、町長の話によると、当地は土壌が肥沃なので昔から農業が盛んで、野菜（特に赤ピーマン）や果物（リンゴ、梨）、またワイン作りや、牧畜も盛んであり、今後も観光関連業と共に、農、畜産業の更なる推進を行っていくとのことであった。

又、当町は香川県宇多津町と姉妹協定を 2013 年結んだとのこと。

巡礼路の町として今後の施策を熱心に説明するアルフォンソ町長

町長の今後の施策方針としては、
①労働の為、村外に出て行った人々が退職後帰村できるよう老人ホームを作ること
②村民のあらゆる世代が楽しめる総合スポーツ施設を作ること
　最後に村のアルベルゲを視察した。石造りの山小屋風で屋根の下側は木材が使用されていた。

　モリナセカ町の視察や町長との会見において、特に感じたこと数点を記しておく。
①年間約 7 万人が通る（聖なる年には約 2 倍）「サンティアゴ巡礼」の重
　要地点であるがゆえに、ホテル・アルベルゲ、レストラン・バル等のサービス業をはじめ、農畜産加工業も成り立っており、又、レオン州全体では人口減少が進んでいるが、町は 880 人～890 人で過去数十年推移しているとの事であり、多大な恩恵を受けている。
②町の中の歴史感ただよう石畳の道をはじめ、町全体が掃除がいきとどき、清潔感があるのは、町民・サービス業にたずさわる多くの人々が、巡礼の路であることに誇りを持ち、巡礼者に対するおもてなしの心を持っているからだと感じた。

③ホテルとアルベルゲ（公的な宿泊施設）の共存にあっては、ニーズが様々であって、簡単ではないが、情報を今以上に、発信することで、
利用者のニーズに答えていくことにより、存続すると考える。

④今後は、巡礼の路の恩恵による、観光、サービス業以外にも、何か新しい産業・文化の創造が必要だと考える。

⑤町長との会話の中で、モリナセカの住民が、四国遍路に訪れて感じたことは、まず宿泊や遍路道などの情報が充分でなく、もっと様々な事に関して情報発信をすべきであるとの事である。

次に 16 時頃レオン県のアストルガに到着した。

ここではスペインが生んだ天才的建築家・芸術家である、アントニオ・ガウディ設計の司教館を視察した。

当司教館は、1889 年から 1915 年にかけて建設された。最初の数年はガウディによって建設されていたが、経費や設計の事などで中断され、1915 年にリカルド・ガルシアという建築家により完成したとのことである。18 時半頃にレオン市に到着

結び

「サンティアゴ巡礼の路」それは、穏やかな空気に包まれて、豊かな田園を行く、大地に引かれた一本の路であり、多くの人々がこの路を 1000 年に渡り、通ったものである。

巡礼者にとっては、「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」聖地にたどり着くのが目的かもしれないが、歩く経験を分かち合いながら、人生観を変える道であり、この経験は、精神的、宗教的そして、スポーツとしても五感に残る、人、様々な出合いが待っている道でもあると思う。

又、それぞれにとって、祈りの空間から祈りの道となるものではないだろうか。

そして、地元の多くの方が巡礼の路がなければ、この町はなかったと言われるように、巡礼の路が自分の街を通っていることを、総ての人々が誇りに思っていることを、強く感じさせられた。

「巡礼の路」も「四国遍路」も同様であると思う。人間は自然の一部であることを再認識すると共に、今こそ古い歴史の見直しをし、平和や人命の尊さを考える道となり、ひいては、低迷する経済の立て直しの一助となれば、又、それぞれの道も永遠のものとなると考える。

巡礼路の町（レオン旧市街地）を視察　[5 月 23 日（水）]

【文責：渡部　浩】

9 時にホテルを出発し、今日は「サンティアゴ巡礼」の主要都市レオン市外にある「サンタ・マリア大聖堂」や「サン・イシドロ寺院」の視察である。

まず、レオン市は、レオン・イ・カスティージャ州の中で最大の面積を占めるレオン県都で、人口約 14 万人、サンティアゴ巡礼のフランス人の道では、パンプローナ、ブルゴスに次いで 3 番目に大きな都市。

レオンの歴史は古く、紀元前 1 世紀にローマ軍によって軍事基地として建設された。6 世紀以降、西ゴート王国の支配下となるが、中世 10～12 世紀には、キリスト教国家であるレオン王国の下で、首都が置かれ、経済、文化、宗教の中心であった。

レオン王国は、その後カスティージャ王国と統合され、離反を繰り返しながら近代に至った。

まず「サンタ・マリア大聖堂」を見学。

大聖堂には 10 世紀にレオン王国を統治していた、オルドーニョ 2 世が埋葬されている。13 世紀から大工事が行われ、ヨーロッパでも類を見ない 1800 ㎡にも及ぶステンドグラスが使われ、その工事は 15 世紀まで続いた。

大聖堂内の装飾は、中世の時代文盲の人たちが多かったことから、旧約聖書と新約聖書の世界が描かれており、それを見ればキリストの教えが理解できるようになっているそうである。特に聖堂内のパイプオルガンは、2 年前に修復され、4 千本以上のパイプがあり、年間を通して無料のコンサートが開かれているとのことである。

次に「サン・イシドロ寺院」の見学

当院は、11 世紀に当時のレオンの王フェルナンド 1 世が自分と王妃の墓として建設を始めたものである。ここは、歴代のレオン王国の王様が

眠っていることで有名である。33 人の王族の棺がある。

見学の後、寺院前広場でコーヒータイム中、地元の小学生たちが、寺院に訪れた人や巡礼者にアンケート調査を行っていた。我々にもアンケートの依頼があり、その内容の一部は、どの国から来たのか。又目的は何かなどの簡単なものであった。観光立国であるがゆえの校外活動であろう。子供たちに朝市で買ったアメリカンチェリーを一緒に食べようと伝えると、人なつっこく、数十人の子供たちが集まって来て、地元の小学生たちとの思いもよらぬ心に残る会話と交流ができた。

12 時 20 分にＡＶＥにてマドリードに向かう。

ジェトロ・マドリード事務所訪問について　[5/24（木）]

【文責：高山　康人】

５月 24 日、ジェトロ・マドリード事務所を訪問、所長の加藤辰也さんと内川未来さんから「スペイン経済の現状」を中心に説明を受けた。

まずスペインはＥＵメンバーであり、２００社を超える日本企業・日系企業がマドリード・バルセロナ中心に進出しており、現在、スペインの経済も順調に推移し、昨年も３％を超える成長をしており、後３年くらいは２．５％～３％（実質成長率）が見込まれ、ヨーロッパの中でも比較的好調に経済が維持されているのがスペインの現状との説明の後、その好調な経済の中身について、まずスペインは観光大国であり、２０１７年の外国人旅行者が８，１７９万人（日本人旅行者４４．２万人）で、スペインの人口が約４，６００万人なのに人口を超える観光客が毎年訪れている。中でも多いのがバルセロナ、次いでマドリードの順で、２０１６年世界の外国人旅行者受入数ランキングでは世界第３位のシェアを誇り、観光ビジネスでＧＤＰの２割まではいかないが、かなりな経済効果をもたらしている。また輸出も大変好調で、６年連続で過去最高の輸出額を更新している状況とのことで、その主な輸出品で自動車が２割弱、年間３００万台近い生産をしており、世界第３位で欧州では２位の自動車生産国である。その他、食料品、鉱物・エネルギー、資本財、化学品、消費財などをＥＵ域内を中心に輸出をしている。感心深かったのは、輸入において、日本からの農水産物・食品輸入が過去最高を記録しているとのことで、近年は空輸で生鮮野菜を直輸入する取り組みや（しょうゆ、日本酒、緑茶）などをはじめヒットしており、県内の中小企業にもチャンスがあるのではと感じたところである。

ジェトロ・マドリード事務所からはスペインの政治経済について説明を受ける

ジェトロ・マドリード事務所の加藤辰也所長と（左から四人目）

過去にはスペインでもテロがあったけれども、比較的治安も落ち着いており、民族の多様性もあり開かれており、ＧＤＰは日本の４分の１ではあるが、人口は約４，６００万人、ヨーロッパの中でも市場性があり、ジェトロ・マドリード事務所では、中小企業の進出を積極的にサポートしていきたいとの意気込みであった。

また日本でも、関心の高い政治問題、カタルーニャ独立問題、合わせてスペインの国政状況について、視察予定のバルセロナスマートシティ次いでデジタルイノベーション（いろんな技術革新）を取り入れ効率的に取り組んでいる概要についても説明を受け視察を修了した。

バルセロナスマートシティ構想について　[5/25（金）]

【文責：高山　康人】

５月 25 日、バルセロナ市役所を訪問、「スマート City 構想計画」のうち、レンタル自転車について、担当のモニカさんから説明を受けた。

バルセロナ市役所でスマートシティ構想について説明を受ける一行

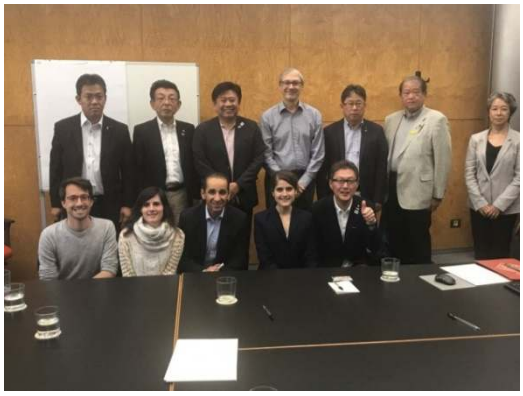
公共レンタル自転車として、11 年前から事業スタートした。一般のレンタル自転車でも観光者用でもなく、シンプルで実用的な乗り物として環境に良く、バスや地下鉄の補足もしており、ステーションはバス停・地下鉄の駅・公共施設など人が集まる近くの道路沿いに 420 箇所あり、丈夫でスタンダードな自転車 6,000 台を配備（ステーションとステーションの間は 300 メートル以上離れていない）している。

配車システムは昼間コントロールセンターのモニターで各ステーショ

ンの状況をチェックしながら巡回中のトラックに指示を出し、配車をしている。またメンテナンスは夜に昼間のコントロールセンターの情報を基に日中誰も使用していない問題がありそうな自転車をトラックで回収し、整備をしている。カスタマーサービスは市内のオフィスで対人・電話・メールで登録、解約などユーザーのあらゆる問い合わせに対応し、ITの活用（ホームページ・アプリ）であらゆる情報を発信して利便性の向上で効率化を図っている。

料金システムについては、年間契約料が47.16ユーロ（保険込）で、最初の30分は無料で30分を超えると30分ごとに74セントでマックス２時間までで、２時間を超えると１時間4.49ユーロ罰金が発生し、３回続けば登録抹消され、また年間登録料を払って再登録しなければならない。

ユーザーの状況は男女同数等で35歳以下が半数以上占め、１台が１日に６～８回、年間1,450万回、また１台が年間4,000キロ～5,000キロ使用されており、自転車システムの世界五大都市の中に入り、また３年前から46ステーションに電気自動車を300台導入も試みている。



スマートシティ構想の説明をしていただいたバルセロナ市役所の方々

普及の要因は、金額が他の公共交通機関より安いこと、ステーションの数が多く（公共交通機関のステーションの近く）、バルセロナ市の80%ほぼ全域をカバーし、自転車レーンも網羅され安心安全であること、使用方法も簡単であることが成功に至っている。これからもステーション数、自転車数とも増やし、自転車のハイブリッド化を進めていくとのことであった。質疑の中では、

○１台の自転車の初期投資は2,000ユーロ～3,000ユーロ（市70%、使用料30%）かかっている。

○民間企業がコンペで落札し、10年の指定を受け運営している。

○随意契約はなくコンペで指定企業が変われば、自転車・ステーションも変わるなどの説明を受けた。

ＦＣバルセロナ　ラ・マシアの視察を終えて　[5/25（金）]

【文責：徳永　繁樹】

先日、世界を熱狂の渦に巻き込んだ2018ワールドカップロシア大会が大きな感動を私たちに与えて閉幕した。そのワールドカップに９つの国代表として、実に１４名もの選手が参戦するフットボールクラブがＦＣバルセロナ（以下：バルサ）であり、今回、今治市における体育施設の指定管理者でもあり、JFAアカデミー今治の運営管理者のNPO今治しまなみスポーツクラブの紹介でなかなか外部からの視察を受け入れることのない選手寮にて、バルサ在籍42年トップチームのフィジカルを任され、現在では、ラ・マシア（育成組織）の育成カリキュラム作成等において、中心的な役割を担われているパゴス氏からお話を伺うことが出来たので、その概要を下記に列挙する。

バルサ独自の運営スタイルなどを説明するパゴス氏（右から２人目）

まず、クラブの運営スタイルは、一般市民が会員となってクラブの運営に当たり、重要事項を投票で決めているとのことであるが、どのような制度であるのかとの問いに、バルサには世界中に143,855人（2017年６月30日）のソシオ（ファンクラブ会員）がおり、クラブの歴史を知る有力なソシオが４年毎にプロジェクトを提案し、投票で会長が選出されている。また、クラブ側も様々な事項についてはソシオに提案し、賛同をいただけないとプロジェクトとしては成立しない、言わば、ソシオの意見を大切にしなければならず、こうした仕組みはヨーロッパのクラブでも珍しいのではないかとお話しされ、日本型クラブとの相違点として、スポンサーは経済的支援、お金の使途についてはソシオに諮るという仕組みが定着していることである。

また、バルサにおいてもチームの収益が大変苦しい時期もあったと伺っているが、財務を改善させた対策についてお尋ねすると、現状の年間

予算とパゴス氏がバルサに関わりを始めた頃との予算対比では、実に1/100であったそうで、バスケットボールやホッケーなど、15種類にも及ぶ様々な競技を展開したことによって、クラブを支援してくれているスポンサーが増加したことに加え、テレビの放映権収入も大きかったと回顧されていた。

更に、経営を安定させる一方で、ソシオを維持していくために、クラブを強くすることや、リオネル・メッシやアンドレス・イニエスタ、シャビなどの生え抜きのスター選手を育成するラ・マシアの役割については、バルサのサッカースタイルはバルサならではのオリジナルなプレースタイルがあり、クラブ加入後すぐに馴染むものではない。スペイン国内を含め世界中から有望な選手を発掘し、カタルーニャに来てもらい、時間と手間をかけながら地元選手として育てることこそが重要な要素であり、そうした観点から選手寮では、スポーツ以外の教育などにおいてもしっかりとサポートする体制がメニュー化され、仮にスポーツ人材としてバルサで大成しないことがあっても、人間としてどう育てていくのか、どうバルサとのつながりを持たせていくのかを絶えず考えているとのことであった。

また、我々から愛媛の若いクラブに対してのアドバイスを求めたところ、パゴス氏からは、クラブの指導者やフロントのあり方が最も大切で、目指すべき姿に向かうための哲学やメンタリティーを考え、共有し、その運営指導に当たらなければならないと大きな目を見開いてお話しになり、スペインにはスペインの、バルサにはバルサのサッカースタイルがあるように、土地気質にあったサッカースタイルの構築こそが必要との認識を示

バルサ施設前でパゴス氏ほかバルサ関係者と

され、そのことが応援してくれるサポーターの喜びにもつながるのではないかと力説されていた。

その後、バルサが有する競技の 18 歳以下の子どもたち（男女とも）が生活している施設内を見学させていただいたが、さながら生活環境は日本のナショナルトレーニングセンターのような趣で、単にスポーツ選手の育成という我々の勝手な思い込みとは大きく異なり、大所帯の中で信頼関係を構築するために何が必要か、宗教観が異なる中で共生するために何が必要か、自らの弱点を補うために何を学び、どう対処すればよいか等々、選手たちの将来を大きく見据えた人材育成のメニューが完備されていた。

帰国後、ラ・マシアについて探求する中で、自身もラ・マシア出身であり、名選手にして名監督でもあるジョゼップ・グアルディオラ氏がヨーロッパで最も贅沢で才能の宝庫と称されるラ・マシオの哲学を次のように評しているものがあったので紹介しておきたい。

「ラ・マシアを出た選手は、他の選手とは違うものを持っている。それは子どもの頃からバルセロナのユニフォームを着て競ってきたことでのみ得られるものだ」

後書きとなるが、今回、極めて貴重な視察をさせていただき、翻って、日本や本県のプロスポーツのあり方に想いを馳せるに至った。企業スポーツからプロスポーツへと転換し、その運営に評価を得たクラブが多数ある中、私の地元で活動する FC 今治は現在、夢の途中にある。厳しい戦いが続いているが、クラブは明確なビジョンを掲げ、それを実現しようとする哲学と具体的な行動指針に基づき、着実に歩みを進めている。こうした今治モデルが完成形に近づき、日本、そして、世界を驚かせて欲しい。そして、その時初めて、プロスポーツが文化に変わり、本当の意味でバルサにおけるソシオのような感情が生まれるのだろうと思う。改めて、視察の受け入れや現地での調整にご尽力をいただいた方々に改めて感謝を申し上げ、報告とさせていただきたい。

ＦＣバルセロナ育成施設視察・及び意見交換

[5/25（金）]

【文責：松尾　和久】

ＦＣバルセロナは 1899 年に設立された歴史あるクラブで、その運営は一般市民が会員となって運営する「ソシオ」という非営利団体が行っており、そして重要事項はこのソシオでの投票などによって決められている。

例えば経営陣のトップは立候補制で、立候補した者がプランを立て、発表して投票で決められる。現在１２万人のソシオがいて、その会員で組織する組合のような会に意見も言えるし、トップへ段階を踏んで会員の意見が上がってくる仕組みになっている。日本ではスポンサーがいて、そこが全てを決めているチームが多いなかで、地域の一般市民を巻き込んだクラブ運営の仕組みが確立されていることに感心した。日本でもスポンサーから入った資金の使い道はファンクラブの意見も取り入れて決めるべきではないかとのアドバイスも頂いた。

また、選手育成にも力を入れており、今回私たちが訪問させていただいた施設は、世界からその才能を見出された１８、１９歳の選手が生活をする寮であった。そこで共に生活しながらサッカーの練習に励んでいるそうである。寮には外部から講師を呼び、学校で学ぶべき授業も行われ勉強もしているとのことであった。

ＦＣバルセロナ育成施設の視察に向かう一行

この寮で育った生え抜きの選手がトップチームで必ずプレーできるとは限らず、他の地域のクラブへ行くことも多いが、引退した後バルサに帰ってきて子どもたちの指導に当たるなど、クラブとの関わり合いを持っていてもらうことが育成したクラブにとっても大切であるとのことで、人とクラブとの関係を大切にしていることを感じた。

チーム育成については指導者が大切であり、チームのアイデンティティーを持った人を使って指導していて、アイデンティティーはこれまで長い時間かけてチームとして試行錯誤しながら、練習にも落とし込んで

育んできたとのことで、愛媛のクラブチームもこれからチームとしてのアイデンティティーを育てながら大きく飛躍することを期待するところである。

今回の視察において、スポーツクラブが継続していくこと、また活躍していくには、ファンとの関わり合い、地域との連携など様々な要素が折り重なって、それを積み上げていくことが大切だと感じた。

愛媛もサッカーのみならず、夢を追っている若者たちをサポートできる地域でありたいと思った。

エスパニョールスタジアム視察[5/25（金）]

【文責：松尾　和久】

エスパニョールスタジアムではファン目線の施設運営を視察

今回視察したスタジアムは2009年から始動した施設で、4万人を収容し、駐車場は800台を収容できる施設である。総事業費は130億円でクラブが100%出資して建設され、年間の維持・管理費は7,000万円かかるとのことであった。

建設の際に工夫した点としては空間を大きくとっていること、観客の流れをスムーズにするための導線の取り方などで、また、トラックを作らずコートと観客席をできるだけ近くして、臨場感を楽しめる作りになっている。

試合のない時の活用としては、コンサート会場としての貸し出しや、食事などでも利用できるようになっている。

このスタジアムは観客、ファン目線で、いかにサッカーを楽しんで頂くか、来てよかったと感じて帰って頂くかを優先して考えられたスタジアムで、日本のガンバ大阪新スタジアムはこのエスパニョールのスタジアムを参考に作られたそうである。

愛媛でもサッカー専用スタジアムを望む声があるが、将来建設できることになれば参考にするべき点は多くあると感じた。